

聖霊降臨後第7主日（特定9） マルコ6章1―6節

〔直訳〕

- 1 1 1
そして 彼は出た そこから、
そして 彼は来る 彼の故郷に、
そして 従う 彼に 彼の弟子たちが。
2 2 2
そして なって 安息日に
彼は始めた 教えることを 会堂で
そして 多くの者が 聞いて 仰天していた 言いながら、

- 「どこから この人に これらのことが
そして 何か この人に与えられた知恵は、
そしてこのような力^aは 彼の手^bを通して 生じて

- 3 3
この人は 大工で、 マリアの息子で
そして ヤコブとヨセとユダとシモンの兄弟でないか
そして いないか 彼の姉妹たちは ここ私たちのもとに^c

- そして 彼らはつまずいていた 彼に。^d

- 4 4
そして 言っていた 彼らに イエスは 次のことを
「預言者は尊敬されずにいない 以外は 彼の故郷で
そして 彼の親戚で、そして 彼の家で」。^e

- 5 5
そして 彼はできなかつた そこで 何ひとつ力^fを行なうことが、
以外は わずかの病人に 手^gを置いて 彼は癒した。^h

- 6 6
そして 彼は驚いていた 彼らの不信仰に。
そして 彼は巡っていた 村を ぐるぐると 教えながら。ⁱ

〔新共同訳〕

1 イエスはその去つて故郷にお帰りになつたが、弟子たちも従つた。2 安息日になつたので、イエスは会堂で教え始められた。多くの人々はそれを聞いて、驚いて言った。「この人は、このようなことをどこから得たのだらう。この人が授かつた知恵と、その手で行われるこのような奇跡はいったい何か。3 この人は、大工ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。姉妹たちは、ここで我々と一緒に住んでゐるではないか。」このよう

に、人々はイエスにつまずいた。4 イエスは、「預言者が敬われないのは、自分の故郷、親戚や家族の間だけである」と言われた。5 ここでは、「こくわずかの病人に手を置いていやされただけで、そのほかは何も奇跡を行うことがおできにならなかった。6 そして、人々の不信仰に驚かれた。それから、イエスは付近の村を巡り歩いてお教えになった。

①構成

①a この段落の中心には「彼らは彼につまずいていた」が置かれており、それ以前の a から c では故郷の人々がイエスにつまずく過程が描かれ、後半の c から a では彼らのつまずきに対するイエスの反応を述べている。「つまずく」とは自分たちの判断や常識から抜け出せずに、イエスが誰であるかを理解できないことである。

①b a と a' の対応関係は、「仰天していた」と「驚いていた」によって作られる。故郷の人々はイエスの教えに肝をつぶすほど驚いたが、しかしそれはつまずきへと向かってしまう驚きだった。イエスはそれに驚く。

①c b と b' の対応関係は、「力と手」によって作られる。ここでの「力」はイエスの手を通して行われる「力ある業＝奇跡」のことである。故郷の人々はそれに驚いたが、つまずいた。そのような人たちの前では、イエスは「力」を行うことができなかった。行ったとしても、誤解されるだけだからである。

①d c と c' の対応関係は、イエスの地縁とか血縁への言及によって作られる。また、c では否定の疑問文によって、イエスを自分たちと同列に引きずり降ろそうとする彼らの強情さが表され、c' では否定文によって、故郷での預言者の運命が明らかにされる。

②どのようにしてつまずくのか（1—3節）

②a イエスの幼少時代を知る人々は、イエスが語る教えに「仰天していた」。「仰天していた」とは、本来「外へと打ち出される」の意味であり、思わぬことに出会って意識が外へと打ち出され、「我を忘れる・呆然とする・圧倒される・打ちのめされる」の意味である。

②b ルカ2章48節では、神殿で学者と討論する少年イエスに両親が「驚く」。使徒言行録13章12節では、キプロスの総督はパウロが魔術師の目を見えなくさせた出来事を見て、主の教えに「驚いて」信仰に入る。これら2回の用例を除くと、この語はイエスの教えや奇跡に接した人の驚きを表す。

②c この語で表される驚きには、教えや奇跡のすばらしさを認めて「賛嘆する・感嘆する」といったよい意味がこめられることもある（マコ12、ルカ9章43など）。反対に、イエスに対する無理解や非難の調子が含まれることもある（マタ19章25、マコ10章26）。イエスの教えや奇跡に出会った人がそこに何を見るかによって、驚きの意味がまったく変わってくる。

②d 故郷の人々は思いもかけないイエスの教えのすばらしさに感嘆したのだろう。この驚きを通してイエスの教えと業の背後に彼と共に働く神を見るならば、彼らの驚きは単なる賞賛を越えた信仰告白となり得る。この驚きはイエスが誰であるかを知る絶好の機会である。しかし、人々の驚きは「彼らにはつまずいた」という結果に終わる。イエスに対する率直な感嘆が、イエスへの怒りにも似た感情へと変化している。この変化の起こる過程を述べるのが、2節後半と3節である。

㉔ 人々はイエスの教えと業に驚いて、二つのことを問う。「どこから」とはイエスの教えの由来を尋ねる問いであり、「何か」とはイエスの知恵と力ある業が一体どういう力なのか、その本質を尋ねる問いである。この問いは、忍耐強く問い続けるならば、イエスが誰かを知ることにつながる有意義な問いである。

㉕ しかし、人々はこの問いの答えを正しく導き出すよりも前に「この人は大工ではないか」と問い始める。このような否定の疑問文は、もはや問いとは言えず、イエスが大工にすぎないことを自分に言い聞かせる言葉となっている。マルコではイエス自身が「大工」とされているが、マタイの並行箇所（一三 55）では「大工の息子」とされている。マタイが「大工の息子」としたのは、肉体労働を蔑視したギリシア・ローマ世界の考え方を考慮したからかもしれない。しかし、ユダヤ人社会では手仕事が高く評価されることはなかったと見られている。マルコやマタイが「大工」に言及するのは、イエスが顔見知りの同郷人だと主張するためであって、イエスの家族を貶める意図はないのは明らかである。

㉖ 人々はさらに、兄弟の名を「ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモン」と列挙することによって、イエスも私たちと同じ人間に過ぎないことを強調する。彼らはイエスの由来と本質を問うことをやめ、彼はマリアの息子であり、その兄弟や姉妹は「ここに、私たちのもとにいるではないか」と結論する。「私たちのもとに」という言葉に示されているように、人々はイエスを自分たちと同じレベルへと引き下ろしてしまう。

㉗ その結果、「彼らはずまずいた」。イエスが畏を仕組んだのではない。自分の価値や評価に固執して、初めの驚きを忘れてしまうとき、彼らはイエスが誰であるか分からなくなってしまったのである。このように彼らはイエスを既知の領域に引き下ろそうとすることによって、自ら「つまずき」という畏に陥ったのである。それは無意識のうちに自分で仕掛けた畏である。

㉘ つまずかせる（スカンダリゾー）
この語は名詞スカンダロン（畏）の動詞形であり、「畏にかかる・落とす・穴にはまる」を意味する。その用法は次の二つに分けられる。

㉙ 名詞スカンダロンが「罪への誘い・偽りの信仰へ導く誘惑」を意味するのに応じて、動詞スカンダリゾーは「罪に落とす・不信仰へと転落させる」を意味する。
イエスは共同体の中で特別の助けを必要とする「小さな者」をつまずかせてはならないと教え（マコ九 42と並行記事）、パウロも「食物のことがわたしの兄弟をつまずかせるくらいなら、兄弟をつまずかせないために、わたしは今後決して肉を口にしません」と述べて（1コリ八 13）、知識を持った強い人々の振る舞いが、弱い人々を罪に誘い、滅ぼす原因にならないようにと教えている。

また、御言葉のために起きる艱難や迫害もつまずきの原因となる（マコ四 17、マタ一 31）。人間が自分の判断や常識から抜け出せずに、イエスを誤解するとき、イエスにつまずく。イエスの知恵や力に現された神の国の到来を見ることができなかった故郷の人々はイエスに「つまずいた」。彼らだけでなく、洗礼者ヨハネも（マタ一 6、ルカ七 23）、弟子たちも（マコ一 427・29と並行記事）、イエスが徹底的にへりくだるメシアであることを理解できずに、イエスにつまずく。

㉚ 名詞スカンダロンが「怒りや嫌悪を引き起こすもの」を意味するのに応じて、動詞スカンダ

リゾーは「怒らせる・憤慨させる・いらだたせる」を意味する。

イエスの教えや行いは、しばしば人々の理解に逆らったり、反対する。ファリサイ派の人々は、イエスの教えが彼らの律法解釈に逆らうものであると知って、イエスに苛立つ（マタイ五12）。イエスの体が永遠の「いのち」を得るための食物であることを理解できない弟子たちも、イエスの教えに憤慨し、もはやイエスと共に歩むことができなくなる（ヨハ六61）。

③奇跡が無意味になる（4―6節）

④ 4節のイエスの言葉を見ると、預言者が敬われない場所が、「故郷↓親戚↓家」というように、人間関係がいつそう密接になる場所へと絞りこまれている。人間関係が濃くなれば、「人間」に関する情報は濃くなる。しかし、それに頼れば頼るほど、預言者を理解するのは難しくなる。預言者を理解するためには、神との関わりが不可欠であり、人間的な知り方をいくら深めても、役に立たないことがある。

⑤ 奇跡はこの人間的な知り方を越えるためのしるしである。奇跡に対する驚きによって人間的な知り方を乗り越えるなら、イエスに働く神を知ることができる。しかし、神の働きを見ようとしないうちは奇跡は単に不可思議な業でしかない。つまりいた人々に対して、イエスが奇跡を行えなかったのは、イエスの力が足りなかったからではない。彼らがイエスの教えと業に神の働きを見ようとはせず、それらを人間的な知り方の内に押し込めようとしているからである。そのようなときには、奇跡を行っても意味がない。奇跡が奇跡とならないからである。イエスは奇跡を「何もできなかった」という表現は、ルカの並行箇所（四16―30）からは消えており、マタイの並行箇所（一三53―58）では「奇跡をなさらなかった」となっており、奇跡ができないのではなく、行わなかった、と述べている。

⑥ 「そしてイエスは教えながら村をぐるぐると巡っていた」を「ナザレでのイエスの拒絶」と結びつけるか、それとも7節以下の「十二人の派遣」と結びつけるか、意見は分かれている。前者であれば、ナザレでの拒絶の結果、会堂で教えられなくなったイエスは故郷を離れて、周りの村々を巡って教えた、の意味になるだろう。後者であれば、十二人の派遣が村々を巡っているときに起ったことを述べるにすぎないだろう。

④イエスは人々の不信仰に驚いていた

⑦ イエスの驚きを表す動詞はサウマゾーであり、人々の驚きを表す動詞とは異なる。サウマゾーは「不思議に思う・驚き怪しむ」を意味する。イエスは人々の「不信仰」を驚き怪しんでいる。なぜなら、「信仰」こそ人間に自然な姿だとイエスは考えているからである。その信仰とは、自分の価値観に固執することなく、目の前の出来事に率直に身を置く自由さである。その柔らかな心こそがイエスを通して働く神の言葉に目を向ける力となる。

⑧ 驚きのうちには、自分の意識の殻を打ち破り、神との出会いへと飛躍する力が秘められている。しかし、故郷の人々はイエスに驚いたにもかかわらず、問うことを止めて、自分たちの次元にイエスを引きずり下ろす。彼らは結局、人間的な知り方を越えて、外に出ることができなかった。これが故郷の人々がはまった「罨」であり、彼らはつまりずく。その彼らの不自由な姿にイエスは驚く。不信仰とはこの不自由さのことである。